



THE UNIVERSITY OF TOKYO



UNITED NATIONS
UNIVERSITY

国際シンポジウム

『移行期にある南アフリカ』

日時：2012年10月4日(木) 10時～12時30分

場所：国連大学本部、エリザベス・ローズ国際会議場

共催：国連大学サステナビリティと平和研究所、東京大学サステナビリティ学教育プログラム、駐日南アフリカ共和国大使館

1994年4月に実施された初めての民主的選挙の結果により、南アフリカは長年の白人による少数支配と人種差別制度に終止符を打ち、ネルソン・マンデラを同国初の黒人大統領とする多人種政権を誕生させた。アパルトヘイトから全ての人に平等・正義・公平をもたらす多民族社会への移行の挑戦を全世界が多大の関心と希望を持って見守る中、南アフリカの新政権は平和、和解、復興と開発のメッセージを発信し、国際社会に熱狂的に迎えられた。それから18年が経過した今日、南アフリカは中国、インド、ブラジルと並んで「新興経済」と称されるようになった。アフリカ域内においても、アフリカ連合(AU)や南部アフリカ開発共同体(SADC)で地域・大陸の経済的・政治的課題と取り組む際に南アフリカの主導的役割に異議を唱える国はない。それでは南アフリカの国内は現在どのようなになっているのだろうか。国を挙げての移行の課題はどうなっているのだろうか。

この国際シンポジウムでは、南アフリカの現状について、特に過去からの移行の課題とその進展の度合いを絞って明らかにすることを目指す。プログラムの構成としては、はじめに、南アフリカを代表する大学のひとつであるケープタウン大学から招いた二人の研究者ーデボラ・ポーゼル教授(同大学・アフリカ人文科学研究所・所長)とマックス・プライス博士(同大学・学長)による基調講演を聴く。小休憩の後、質疑・討論セッションを設け、3名の招待討論者によるコメントを聴いた後で、会場参加者も交えて基調講演者との討議を行う予定。

プログラム

(言語：日英同時通訳)

10:00-10:10 歓迎の挨拶

武内 和彦 (国連大学副学長)

10:10-10:50 基調講演： 移行期の南アフリカ

デボラ・ポーゼル (ケープタウン大学アフリカ人文科学研究所所長)

10:50-11:30 基調講演： 1994年の民主化以降の南アフリカで貧困と不平等はどうなったか？

マックス・プライス (ケープタウン大学学長)

11:30-11:40 小休憩

11:40-12:25 基調講演者との討論・質疑

討論者1: 牧野 久美子 (日本貿易振興機構アジア経済研究所 研究員)

討論者2: 加藤 賢治 (読売新聞 記者)

討論者3: ベン・オコロ・サイモン (国連大学サステナビリティと平和研究所 研究員)

12:25-12:30 閉会の挨拶

モハウ・ペコ (駐日南アフリカ共和国特命全権大使)

シンポジウム司会：オボジフォー・アギナム (国連大学サステナビリティと平和研究所 シニア・アカデミック・プログラム・オフィサー)

<基調講演者の紹介>

デボラ・ポーゼル教授（ケープタウン大学アフリカ人文科学研究所所長）



デボラ・ポーゼル(Deborah Posel)博士は、ケープタウン大学の社会学教授で、2010年1月に同大学に設立されたアフリカ人文科学研究所の初代所長である。それ以前は、長年南アフリカのヴィッツウォーターズランド大学(University of Witwatersrand)で社会学教授として教鞭をとるとともに、2000年に自ら設立したヴィッツ社会経済研究所(Wits Institute for Social and Economic Research /WISER)の所長を務めた。ポーゼル教授は、ヴィッツウォーターズランド大学出身で、オックスフォード大学（ナフィールド・カレッジ）で1987年に博士号を取得。1985～1987年にはグウィリン・ギボン研究奨励賞を授与された。

ポーゼル博士は、ハーバード大学客員教授、パリの社会科学高等研究学院（EHESS）客員教授を歴任。アフリカ科学アカデミーのメンバーで、ステレンボッシュ先端研究所（STIAS）のフェローでもある。南アフリカのアパルテイト期とその後の政治・社会の多様な側面について研究し、多数の著書・論文を発表している。代表的著作として *The Making of Apartheid, 1948-1961* (Clarendon Press, 1991 & 1997)、Phil Bonner と Peter Delius との共著による *Apartheid's Genesis* (Raven and Ohio University Press, 1994)、Graeme Simpson との共著による *Commissioning the Pst: Understanding South Africa's Truth and Reconciliation Commission* (WUP, 2002)が挙げられる。

マックス・プライス博士（ケープタウン大学学長）



マックス・プライス(Max Price)博士は、2008年1月にケープタウン大学の学長に就任した。それに先立つ2年間は公衆衛生、保健政策、医学教育、保健衛生人材の育成の分野のコンサルタントとして活動していた。1996年～2006年はヴィッツウォーターズランド大学(University of Witwatersrand)の保健科学部の学部長を務め、「内部和解委員会」等の制度改革措置を主導した。同時に新しい大学院レベルの医学教育プログラムや農村保健、生命倫理、スポーツ医療、緊急医療、生体医科学等の学術プログラムの推進にも貢献した。また、南アフリカで最初の大学が所有する民間研修病院や研究会社を開設した。

プライス博士は、1979年にヴィッツウォーターズランド大学で医学部教育を修了、London School of Hygiene and Tropical Medicineで地域医療、また母校で労働医療等を学んだ。その間ローズ奨学生としてオックスフォード大学にも留学した。専門的業績には臨床医療経験や農村部でのプライマリー・ヘルス・ケアも含まれる。また研究については、London School of Hygiene and Tropical Medicineで健康の経済学分野のフェロー、母校の保健政策センターの研究員・センター長、Harvard School of Public Healthで国際医療の武見フェロー（1994～1995年）として実績を挙げている。プライス博士は、政府のヘルス・ケア資金調達に関する大臣諮問委員会・委員長を務めたほか、WHO/FAO/UNDPの熱帯病研究プログラムの資金調達方法の改善に関する特別タスクフォースにメンバーとして参加した。プライス博士は、保健衛生システムの研究、健康の政治経済学、医療経済・金融、医療の民営化、農村医療サービス、保健衛生システムのコンピュータ・モデリング、医学教育・人材開発等について多数の著作を発表している。